

長崎の美術工芸史を創設された大叔父

山口喜久子

林源吉の思い出

私が東京の空襲により長崎に疎開してまいりましたのは戦時中のことでした。それは祖母が先祖代々ずっと受けついできた長崎上筑後町の自宅を守っていた事と私の両親が共に長崎を古里としていたからでした。

祖母の住む長崎上筑後町の家の四軒先が大叔父林源吉の家で其処から少し行った処に杉山の家(迎陽亭)がありました。

私の祖母山口ヨネはオランダ通詞志築家の長女で長男は志築新太郎、次女ミヤは同町にあった有名な迎陽亭の杉山家に、三女チヨも当時同町の林源吉に嫁いでいました。

当時、私は小学生で、同じ町内に祖母の四人兄弟の家がありましたので私は毎日、近くの四人の家を廻って遊んでいました。

林のおじには一人息子の勝兄がいました。勝兄は東京の私の家に時々あそびに来ていましたが、私が長崎に来た時には召集をうけ、軍隊にいました。

林のおじは、私を孫のように大変可愛がって下さいました。林のおじは生来、学問がお好きで歌舞伎や和楽もお好き、気候に生きる性格で当時は戦後の混乱期というのに、小母には、あまり頼りになる人ではなかったそうです。



古賀人形(彩色) 林源吉筆

本来、林のおじは鍛冶屋にあった老舗丸一家具屋の四男坊で兄達は皆ほかに出てしまふ家業を全てまかせられていたそうです。しかし商売に専念する事がなく趣味の長崎青貝細工の職人を店に入れて長崎工芸を作らせ、自分もアトリエを構えて長崎の洋画家彭城貞徳について洋画を、更に栗原玉葉について日本画も学ん

れ暫く逗留しておられました。木野先生は其の後、林のおじ様の御長男で戦病死された俳人の林勝兄の「夕ざくら」の句碑を深崇寺墓地内に建立する時にも協力して戴きました。そして更に、その「夕ざくら」の句に曲をつけ演奏して下さいました。句碑の設計は勝兄と長中で同級生の親友・丹羽漢吉先生が設計され其の除幕を私がさせて戴きました。

林のおじは、あまり人付き合いは上手でなく交友関係も少ないと思つていましたが、以外と伯母と共に親戚の世話もよくしておられました。又東京方面から来られる有名な方々のお世話もしておられましたし、各方面から良く「林先生は御元氣ですか」のお電話も戴いておりました。

戦後は市立博物館の専門委員として島内八郎先生と共に毎日勤務し何か執筆を続け、お宮日や丸山春雨祭り、郷土芸能大会、展覧会には良く解説や挨拶に出かけておられました。

昭和三十八年六月に病を得て片淵町の原爆病院に入院されました。そして、皆様に病院には決して見舞に来ない事、私は其の後の二ヶ月、病院のカーテン外でお見舞人の対応に追われました。但し市立博物館の越中哲也先生のみには、いらして戴きいろいろと話しておられました。

その年の原爆の日、八月九日朝、林のおじは伯母につきそわれ静かになくなられました。

葬儀は寺町の菩提寺深崇寺様がちょうど本堂が修理中でしたので隣の越中先生の御実家光源寺の本堂をお借りしました。是も何かの御縁と参列者一同はなしておりました。伯母も昭和四十五年八五才で静かに上筑後町の家でなくなられました。

林のおじは、生前よく絵を描いておられ、暇がある時には、日曜大工もやり、とことん仕事を止めない人でした。又暇があると薄茶をたしなみ、お庭には京都の苔寺から戴いてこられたガンピや秋海棠、中国西湖から持ってきた草も大切に植えておられました。裏庭のトンゴ柿は秋になると御自身で割り竹でちぎって御近所、親戚にくばっておられました。好きな食べ物はお魚と野菜の煮付け、「紅さしの南蛮漬」でした。特に南蛮漬がお好きで、「紅さし」がなくなると「小鰻」で作って伯母は毎日用意しておられました。

今も、おじ、おばの有りし日の事を思い懐しんでおります。(表千家長崎支部参与)

参考・林源吉先生伝記は「長崎県大百科事典」(長崎新聞社刊)。
林先生の論考は多く「長崎談叢」(長崎史談会刊)にある。

でおられたそうです。それで店内の飾りつけはまるで美術館のようだったそうです。

おじ様の若い時は遊びも大変お上手だったようで「成駒屋物語」を書いておられますし、其の頃の思い出の品でありましたでしょうか、書棚の上に「青貝の櫛と簪」を布に包んだ小さな箱が置かれていました。この箱はおじが亡くなられた後、出てまいりました。

昭和二十年八月九日午前十一時頃警報が解除になり私は縁側で涼んでいた時でした。バタバタと聞きなれない飛行機の音と共に北から港に向つて東京で見なれたB29より小さな敵機が低空で飛び去って行きました。すると間もなく空は一面ピンク色に光り大きな大爆音と共に家がゆれ表の格子、ガラス戸、天井板等が飛んで来ました。その時、玄関の下駄箱は横に向き、玄関の戸は外れ、外に出られませんでした。雨戸なども飛んで来ました。暫くしてから、私達は上の聖福寺横の防空壕に避難しましたが、「横の福濟寺に火が付き危ないから」と言われ出されたのですが、下の道は浦上・立山方面から被爆して下つてこられる人達が多く、大混乱でなかなか歩けませんでした。

私達は爆弾が近くに落ちたと思つたので、中島川を渡って愛宕町の親戚の家まで登って行きました。翌日より、先ず食糧がありませんでしたので、田上の知人の農家に行き食糧を分けて戴きました。林のおじは駅前を歩いていて被爆、大したやけども無く帰つてこられた由、そして筑後町の家はちょうど物陰でどうにか残つていたので家を片づけ、邸内に井戸や裏座敷も残つていたので住まわれる事にされたそうです。

その頃、林のおじは長崎市立博物館に勤務されていたそうですが、戦時中のことで同館は閉館され、長崎市の行務を手伝つておられたそうです。其の時、林のおじの処に同じ市役所に勤めておられた木野晋見雄先生が城山町の自宅で家族も家もなくされ、林の家の離れに御位牌を持参さ

風信

○十一月を昔は霜月といひ今月より寒い風が吹きはじめるといふ。但し旧暦では冬を迎える日を「立冬」といひ、今年の「立冬」は現在歴では十一月七日に当る。冬が来ます。体調をこわさないように致しましょう。

○昔の「長崎年中行事覚書」をみると「十月・最初の亥(日)の日を「玄猪祝」といひ「亥の子餅」を搗きお互に祝す」とある。現在歴で、旧十月最初の亥の日は十一月二十二日になるが、長崎で此の日「亥の子餅」をいただく家が残っているでしょうか。

○平安時代の朝廷の行事控にも、江戸時代の宮中行事にも十月行事として「玄猪」とあり「二六〇三年の長崎版行の日ポ辞書にもinocoguno」と記してある。「猪(亥)は多くの子を産み育てる」と言う説より家族の繁栄を神に祈る日になったと記してある。

○十一月は、文化の日があり「文化財を大事に保存する心構えを意識させる月間」とある。特に長崎市内には全九州の国宝建造物六棟のうち三棟(唐寺崇福寺内二棟・大浦天主堂二棟)が保存されている事を承知しておかねばならない。之に対して先月の対馬における文化財盗難事件、残念な事であったと考えている。

○残念といえば上海長崎間の航路、来年まで一時休航との事。私達の祖父が「二次会は長崎で、二次会は上海で賑かにしましうや」とお友達と話しておられたのを不図おもい出し、私自身も何度となく上海博物館や蘇州方面に行き、中国の先生方に日中の文化交流史について御教授をうけた事に感謝申し上げますと共に、何か懐かしい思い出が多い。

○次いで、先日長崎歴史文化博物館で開催されている「長崎福建友好三十周年記念中国福建博物院展」の見学に行き、再び「日中国交の事」につき深く考えさせられるものがありました。(展覧会は十一月三十日迄開催)

○今月に寄贈いただいた書籍
西日本文化協会より「西日本文化No.459」。今回は九州北部の長崎県壱岐・小値賀。福岡県の相島・姫島。佐賀県の馬渡・高島等・海が創つた暮らしと歴史の特集が多く、大いに参考になりました。

○郵便史研究会より「同史研究32」。今回は特に同史研究者として有名な数内吉彦先生の論考「幕末における長崎での前島密」について、今まで一般に知られない事が多く記してあり、今後の長崎学研究に参考になるものが多かった。

○「楽」社より「楽17号」を戴く。今回は長崎人の発明と技術特集で活字の文化、水産、料理と別集として二十六聖人西坂の丘があった。(二〇五〇円)

